
【特集】第90集刊行記念『日本労働年鑑』の歩み

特集にあたって

鈴木 玲

本特集は、『日本労働年鑑』第90集の刊行を記念するもので、歴代の『日本労働年鑑』の編集長であった早川征一郎氏、五十嵐仁氏（両氏とも名誉研究員）に年鑑にまつわる思い出を書いていただいた。両氏の論考は、『日本労働年鑑』の時代区分や構成の変遷、実際の編集業務の内容などについて触れている。また、五十嵐氏の論考は、『日本労働年鑑』だけでなく、同氏の研究所とのかかわり、在職中に関与した他のプロジェクトについても言及している。

『日本労働年鑑』の第1集（大正9年版）は、1920年5月に刊行され、2020年6月に刊行された『日本労働年鑑』第90集は、年鑑刊行の100周年を記念する巻ともなった。第1集刊行後、年鑑は昭和15年版（1941年9月刊）まで21冊刊行されたが、「時局の圧迫」により42年以降は停刊となった。年鑑は第22集「戦後特集」の刊行（1949年8月）で復刊された。第23集（1951年1月）以降は継続して刊行され、2020年の第90集の刊行に至った。また太平洋戦争中の年鑑のブランクは『日本労働年鑑』戦時特集版（第1部『太平洋戦争下の労働者状態』（1964年10月）、第2部『太平洋戦争下の労働運動』（1965年5月））の刊行によりカバーされることになった。そのため、『日本労働年鑑』の巻数は、戦時特集版を加えると92巻を数えることになる。

『日本労働年鑑』第90集は、特集「『日本労働年鑑』の100年——時代を反映した構成の推移」を組み、主に第1集～第45集の内容や構成の変遷について分析した。労働年鑑の歴史について関心がある方は、年鑑の特集も参照していただければ幸甚である（なお、同特集は研究所ウェブサイトでも公開されている）。

本特集が、100年にわたり日本の社会労働問題を記録してきた『日本労働年鑑』の役割や意義について再考する機会となることを望む。

（すずき・あきら 法政大学大原社会問題研究所教授）